



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	貧困状況下における子どもの生活と主体性 ; 子どもへのインタビュー調査の結果から
Author(s)	藤村, まどか
Citation	教育福祉研究, 18, 41-52
Issue Date	2013-01-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51128
Type	departmental bulletin paper
File Information	Fujimura.pdf



貧困状況下における子どもの生活と主体性 —子どもへのインタビュー調査の結果から—

藤 村 まどか

1. はじめに

—「子どもを中心に据えたアプローチ」

“子どもを主体として捉える”—これは近年子どもの貧困研究を行う者にとって、基本的な視角となりつつある。これまで貧困研究において、子どもは「世帯」や「世帯主」の陰に隠れて、子ども自身を主体として理解し貧困を分析することに関しては手薄であった。そのため子どもの貧困に関する議論は、貧困を解決するための実証研究であることに加え「子どもを人生の主体としてとらえると同時に、発達の主体として理解する」という視点を持つことが重要である（松本 2008）。

貧困研究において「子どもを主体として捉える」ためには、子どもたちが「エージェントとして行動する能力」を持っており、実際に行動していることを明らかにする必要がある（藤村 2011）。子どもたちが日常で「エージェントとして行動」しようとする際、子どもたちの年齢によって出来ることが限られる。それでは貧困はこの通常の制約に加えて、子どもたちの意識や行動にどのような影響を与えるのだろうか。

リッジ（2010）は、子ども自身にインタビューをするという「子どもを中心に据えたアプローチ」と自身が名付けた研究手法を用いた。それによって貧困状態に置かれている子どもの主観的な世界を細かく描き、貧困状況に置かれた子どもたちがどのようなことに制約感や不満を感じ、またその中で何に重要性を置いているかを明らかにした。

日本における子どもの貧困研究では、貧困状況下に置かれた子どもたちが日常生活においてどのようなことを意識し、行動しているかを述べた研

究は多くない。その中で子どもの貧困に着目し子ども自身に直接インタビュー調査を行ったものに大澤（2008）や小西（2003）の研究がある。これらの研究からは子どもたちが貧困の下で、「諦め」や現状から「逃げる」といったその場しのぎの行動を表していることがわかった。

これらの研究では、貧困状況下に置かれた子どもたちの主観的な世界を描き、生活からの逃避といった行動の特徴を見出した。しかしその一方で異なる階層での比較がされていない分¹⁾、その行動の特徴が貧困によるものなのか、「子ども」という年齢によるものなのかは明らかではない。

例えば Lareau（2003）の研究では、はっきりと異なる階層に位置する家族の生活をそれぞれ詳細に観察することで、階層間での子育てにおける姿勢の違いや周囲の公的機関との関わり方の違いを描いていた。Lareau（2003）の研究は「子育て方法」に主眼が置かれており、子どもが主観的に描く世界に焦点を当てたものではない。しかし Lareau（2003）の研究の意義は、貧困家庭だけに焦点を当てるのではなく、様々な階層に目を向けることでそれぞれの特徴を述べる事が出来ている点にある。

よって本研究では「子どもを中心に据えたアプローチ」を階層の異なる子どもたちに用いることで、各階層における子どもたちの意識や行動の特徴を明らかにし、貧困が子どもたちの意識や行動にどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 分析の枠組みと調査概要

本研究では、「形成された価値規範と行動様式か

ら生み出される意識と、その意識を元に取り入れた行動」という一連のプロセスを「主体性」として考え、基本的な研究の視点とした。「主体性」という言葉の定義には様々な議論がありその捉えは一樣ではない。例えば浅海（1999）の主体性の定義と実際の主体性尺度からは、「主体性」を自身の力で自身をより良い方向に導くためのものとして捉えていることが窺われる²⁾。

しかし、筆者が使う子どもの「主体性」はそのような一面的な捉えではない。子どもの「主体性」は必ずしもその子ども自身をより良い方向に導くとは限らないと考える。例えば、健康的ではない食習慣の中で育てられれば、その食習慣を繰り返すことに疑問を持たないであろう。

このように子どもの実際の行動の背景には、それまでに形成された価値規範と行動様式があり、それを元に自身で考え何らかの行動をとるというプロセスがある。そのためこのように「主体性」を捉えることで、貧困状況下に置かれた子どもたちを理解できるのではないだろうか。

本研究では、子どもたちの主体性を捉えるため家庭背景によって「一般家庭の子ども」と「貧困状況下に置かれた子ども」という二つのグループに分け、それぞれの子ども達の「意識」と「行動」に注目した。なお本研究では後者のグループとして児童養護施設で生活する児童を対象とした。児童養護施設の中で生活する児童は政策的な介入がなされ一定水準の生活が保障されているという意味でも、いまだ不安定な家庭の中で暮らさざるをえない児童に比べると、これらの児童を後者のグループとして考えることには議論がある。この点については本論の4章で論じる。

そして子どもが多くの時間を過ごす実生活の局面として、家庭・施設、学校、習い事の三つの場を設定した。その三つの生活の局面の中で、「場における主体性」(局面ごとの決まりや日常的に行われていることに対しどのように意識し行動しているのか)という視点と、「人間関係における主体性」(人間関係を構築する際にどのように意識し行動しているのか)という視点を置いた。更に子ども

たちは何らかの将来の見通しを持ちながら生活していると考えられる。そのため、現在の三つの生活の局面とは別に、将来の見通しを抱く際の主体性という視点を設定した。

具体的には、インタビュー調査に応じることができる年齢であることを前提に、中学生ないし高校生の子どもの上に上記の枠組みに沿ったインタビュー調査を行った。2011年10月から11月にかけて、中学生～高校生の一般家庭の児童（以下家庭児童）5名と、北海道に所在するA児童養護施設の高校生の児童（以下施設児童）3名にインタビュー調査を行った。家庭児童については、知人を通して先に子どもの母親にインタビュー調査を依頼し、母親を介して調査への協力の上承を得られた子どもに調査を行った。施設児童については、中学生、高校生の子どもの中から施設職員に選んでいただき、調査への協力の上承を得られた子どもに調査を行った。なおそのうちの1名(F)は調査以前から筆者が学習ボランティアに行くという形で関係があった。調査対象者の基本属性については、表1にまとめた。

インタビューは1対1の個別面接の形態を取った。子どもたちには事前に録音の許可をもらい、全ての子どもにおいて録音を行い、後日書き起こしを行った。インタビュー時間は一人1時間～2時間であった。インタビューでは、「家庭・施設」「学校」「習い事」「将来の見通し」の四つの視点から、その場での過ごし方や人間関係への意識について、子どもの話に合わせて質問の順番や聞き方を変えていくという形を取った。

なお、以降のインタビューの表記について、【 】は筆者の発言、()内は筆者が内容を補った部分、……は省略部分という表記で統一している。

3. 各局面における子どもたちの主体性

(1) 家庭・施設

1) 場における主体性

i 家庭・施設での日常生活

はじめに、児童の生活の場として家庭と施設における主体性をみていく。

表1 調査協力者の基本属性

	性別	年齢	学校	学年	世帯構成	父職業	母職業	住居	在施設期間
A	男	17	公立高校	3年	父・母・姉・自分・弟	公務員	教師	一軒家	—
B	男	16	公立高校	1年	父・母・姉(大学1年)・自分※1	公務員	主婦	一軒家	—
C	男	12	公立中学	1年	父・母・姉・自分※2	不明	不明	一軒家	—
D	女	16	私立高校	1年	祖母※3・父・母・自分・弟(小6)	教師	教師	一軒家	—
E	女	14	公立中学	2年	父・母・自分・弟(小4)	公務員	公務員	一軒家	—
F	女	17	私立高校	2年	曾祖父(故)・祖父・祖母・母の妹・自分※4	—	—	児童養護施設	前施設：中2～中3終り 現施設：中学卒業～現在 (約1年半)
G	男	16	公立高校	1年	父(故)、母(故)、姉(8個上)、姉(4個上)	—	—	児童養護施設	小1から何度かショートステイ 入所：小2～現在(約7年半)
H	女	18	私立高校	3年	父・母(故)・弟(小6)・弟(3歳)・弟(2歳)※5	—	—	児童養護施設	小6の10月～現在(約6年)

※1 Bは同居ではないが、市内に住んでいた祖父を8月に亡くしている。その祖父がBにとっては大きな存在であった。

※2 Cには東京で働いている兄(24)がおり、現在別居中である。

※3 Dの祖母は二世帯住宅という形態での同居である

※4 Fの母は彼氏と共に違う所に住んでいた

※5 家族に弟(中3)がいるが、別に住んでいた。中3の弟は両親が同じであり、一緒に暮らしていた3人は父が異なる。

(中学校の頃は)帰ってきて、19時半くらいで、宿題して、ご飯食べて、風呂入って、寝ます。……今も、今は意外と20時くらいに着いて、まあ、普通に。《D：家庭児童》

表2やDの発言からもわかるように、家庭児童たちの語りからは日常的な学習習慣があることがわかった。また家庭児童にとっての家庭は、帰宅後の夕食やお風呂など生活の基本的な行為が行われているのに加え、「テレビ」や「ゲーム」などの余暇時間を過ごす場所としても意識されていた。

それでは一方施設児童たちは施設という場をどのように捉えているのだろうか。

【(休日は)学園にいる?】学園にはほとんどいない。【どこ行ってるの?】ばあちゃんち行ったりとか。なんだろう、あと…うーん。とにかく学園にはあんまりいない。《F：施設児童》

良かったことはやっぱり、ここに来て、みんなと、なんか、いることですかね。《G：施設児童》

Fは休日の過ごし方について「学園にはほとんどいない」と語っており、Fにとって施設が落ち着ける場所にはなっていないことが読み取れる。しかし、一方で施設に来て良かったこととして、GやHは共に過ごす人がいることや相談する存在がいることをあげており、Fからも職員に信頼を

表2 家庭での過ごし方

	A(公立高3男子)	B(公立高1男子)	C(公立中1男子)	D(私立高1女子)	E(公立中2女子)
平日	部活引退後：勉強中心・息抜きに本や素振り、ランニング	部活中：20時帰宅、ご飯やお風呂、勉強 部活退部後：テレビ・勉強・ご飯・自由時間	勉強(学校・塾の宿題)・ゲーム	部活のため20時帰宅、ご飯・宿題・風呂	習い事の無い日はテレビ・ある日はその練習・塾のある日は塾へ
休日	勉強・テレビ・友達と遊ぶ	1日30分は勉強・ご飯・自由時間	先輩と遊ぶ・ゲーム	ほぼ部活	部活が主・帰宅後母が外出好きのため、それに付き合う・宿題
長期休暇	野球部の友人と遊ぶ	—	—	ほぼ部活・休みは一週間くらい	ほぼ部活

置いている語が見られる。ここから現在の施設に来ることで安心感を得ていることがわかる。

ii おこづかいとアルバイト

子どもの消費行動は、子どもたちが暮らす家庭に大きく影響を受ける。この事実、子どもたちがどのようにおこづかいをやりくりするかということや、アルバイトをどのように捉えるかに影響を及ぼす。表3より、家庭児童は自分が何にお小遣いを使うかということに関し、自分の趣味や友人との交際費など比較的自由に選択することが出来ている。

一方施設児童は、何かを「買うっていうよりは、遊びに行くお金とコンタクト」(H)というように、主に交際費や定期的にかかる支払いをおこづかいの中でやりくりしていた。

【おこづかいで何買うの?】買うっていうよりは、遊びに行くお金とコンタクト。3か月のやつ買ってるから、5000円だから、2000円、2000

円、1000円に分けて使ってる。《H：施設児童》

このようなやりくりの違いの背景には、経済的に頼ることの出来る相手が確立しているかどうかの影響している。家庭児童は欲しいものがある時には、クリスマスや誕生日のプレゼントにもらうという戦略を取っていた。しかし、施設児童にとって親族は「究極で(=どうしてもなくなった時の最終手段で)頼む相手であり、家庭児童が親に頼るのは異なる。

おこづかいのやりくりという経験自体は家庭児童・施設児童どちらも行っている。しかし欲しいものがある時に頼りに出来る存在の有無は、子どもが何にどれだけお金をかけることが出来るのかという選択の幅と、実際に何にどれだけお金をかけるのかという行動の表れに影響をもたらすと推測される。

またアルバイトについて、実際にアルバイトが出来る条件が整っていたとしても、経済的に困難

表3 子どもの経済活動

	A(公立高3男子)	B(公立高1男子)	C(公立中1男子)	D(私立高1女子)	E(公立中2女子)	F(私立高2女子)	G(公立高1男子)	H(私立校3女子)
お小遣いの有無	不定期：必要な時にもらう	2000円	月2000円	月5000円	中1：1100円 中2：1200円 中3：1500円 になる予定	月5000円	月5000円	月5000円
お小遣いの使い道	野球道具 本 交際費	ガンブラ 食費 交際費	ゲームソフト	食費・本・漫画 (服は親が買ってくれる) 交際費	友達の誕生日 プレゼント 友達と一緒に 買う本	交際費	学校の購買で 買い物 交際費	交際費 コンタクト
ほしいものがあった時は?	親にお金をもらう	—	—	自分で貯める クリスマスや 誕生日に頼む	—	「究極ではあ ちゃんに頼 む」	欲しいものが できない	祖母に頼む
アルバイトの有無	無し	無し	無し	無し	無し	コンビニの店 員／週3日・ 1日5時間	無し	コンビニの店 員／週バラバ ラ・1日5時間
アルバイトの有無の理由	勉強が忙しい ため	高校で禁止	—	高校で禁止	—	退所後の自立 に向けて	部活が忙しい ため	退所後の自立 に向けて
アルバイトへの印象	稼いだお金は 自由に使える	稼いだお金は 自由に使える	—	—	今のお小遣い では足りない から補いたい	「楽しい」 「緩い」 「他の仕事に 比べたら楽」	—	「楽しい」 「変な人が良 く来る」
アルバイト今後したいか	大学でしたい	アルバイトを している姉が 遅く帰してく るのを見ると、 自分は早く家 に帰って来たい	高校でもしな い	大学でしたい	高校でしたい	—	—	—

ではない家庭で育つ子どもたちは、Aが「勉強で忙しい」ことを理由にアルバイトをしないように、アルバイトをするかどうかを選択できる状況にあることが明らかになった。一方、FやHは経済的に自身の家庭の頼ることが出来ず、施設退所後の自立に向けた貯蓄のためにアルバイトを行わざるを得ない。FやHにはアルバイトをする・しないということに選択の余地がないのだ。

更にアルバイトが持つ意味も、家庭児童と施設児童の間で違いがあった。

(大学)入ったらやりたいとは思ってます。【なんで?】自分で稼いだものならなんか気兼ねなく使える。今まであの、ほんと野球ってお金かかるんですよ、いろんなものに。それでもう親にお金かけてたんで、自分で稼いだものは自由に使えるかなって。……できれば今もバイトやりたいんですけど、まあ勉強あるからさすがに無理かなって。《A：家庭児童》

一人暮らしになるから、ここ出たら。それのお金貯めてる。《H：施設児童》

家庭児童にとってはアルバイトは「現在の」自分の生活のために行うもので、そこで得るお金は「自分で稼いだもの」だから「好きに使える」というものだった。しかし施設児童の場合は、アルバイトは退所後の自立に向けたためのもの、つまり「将来の」自分の生活のために行うものであり、決して「好きに使える」お金という意識はなかった。

2) 人間関係における主体性—「家族」が持つ意味

家庭児童は、「日常会話」として「テレビ」「ゲーム」「学校」の話をするなど家族内でのコミュニケーションを良くとっていた。

普段はいろんなこと話しますよ、結構。日常会話、テレビの話とか学校であった話とか。《A：家庭児童》

服とかは結構親が買ってくれるので。《D：家庭児童》

また1)でも述べた通り、親は経済的に頼れる存在として成り立っており、ほしいものがあった時にお金をもらうことが出来たり、服を買ってもらえたりする存在として意識されていた。

一方、今回の調査協力者のF、G、Hの施設入所理由は、「母親との生活が上手くいかなかった(F)」、「両親の仕事や体調不良の関係(G)」、「虐待(H)」となっており、生育家庭で困難があった様子が読み取れる。

私が小1から小6までずっとばあちゃんちにいたから。でそこに母さんの妹もずっと一緒に住んで。で(母親が)結婚したからなんか、意味がわからないけど(自分と)別居してたから、すぐもう。だから小1から小6までずっと(祖母の家で)一緒にいたから。《F：施設児童》

【家族何人家族だったの?】父さんと母さんと、うちと、弟3人。てか、なんかいっぱいいる。まあ、色々複雑で、色々。うちが把握してるのは、弟が4人いて、一緒に暮らしてたのは3人。……おばあちゃんとこ行くと、もう一人の弟? 4人目の弟がいるの。まあ、色々複雑。《H：施設児童》

また上記の通り、Fは入所前に祖父母や叔母と暮らしていた経験があり、Hも継父と実母と異父弟3人と生活しており、二人の周囲では「家族」が「複雑」なものとして捉えられていた。

また、施設児童のFやHも祖母が経済的に頼れる存在として成り立っているようだが、Fは施設退所後の同居を祖母から断られており、経済的に頼ることができないことを意識している。

【卒業して、学園出たら一人暮らし? おばあちゃんちでは暮さないの?】来んって言われた(笑)行って良い?って言ったら来んな!って(笑)わかったって。【それはなんでとか】多分苦しんだと思う生活が、おじいちゃんとおばあちゃんも。ローン払えないって言ってたし。《F：施設児童》

家庭児童にとっての家族（特に親）は頼りにできる存在だが、施設児童にとって家族は決して気軽に頼れる相手ではないということが、Fの発言から明確に読み取れる。

（２）学校

１）場における主体性

i 勉強への取り組み方

学習への苦手意識がある場合、「自身で勉強をして解決する（A、B、D）」「塾へ行く（B、C）」「先生に聞く（F、G、H）」「友達に聞く（A）」「親類に聞く（B）」などの行動を取っていた。この行動によってわからない部分や、苦手意識を克服しようとする一方で、「スルー（F）」「ほっとく（G）」「授業中に寝てしまう（G、H）」というように、わからない部分や苦手意識をそのままにするという行動や、授業自体を回避するという行動も見られた。

FやHは小学校時代や中学校時代に不登校や一時保護のため学校に行っていなかったことで基礎知識が不足していることを意識している。また、Fは現在の施設に入所になる前、中学３年の１年間特別支援系の施設に入所しており、その時期の知識が不足していると意識している。FやHはそのような自身の基礎学力不足を理解し、わからない所を教師に聞きに行くという行動を取りつつも、結局は理解できないまま過ごしている。

【習ってないやつとかいつもどうするの？】スルー。【したらね、教えてくれないんだ、先生。聞きに行ったりするの？ 授業の後】（うなずく）【でも教えてくれないんだ】（うなずく）【まじか】授業でやったこと復習されるくらい。《F：施設児童》

（数学は）小学生から苦手だった。分数とか少数の時期に学校行ってなくて。不登校になって、一時期。その時期行ってないし、なんかその分数とかの時期には、兎相にいたから授業受けてないし。だからなんかほとんどできない。その辺の勉強全く出来なくて。……【じゃあもし勉強しててわかんないことあった時とかは

先生に聞いたりとかするの？】うんする。で教えてもらって、まあほとんど理解できない（笑）《H：施設児童》

施設児童が生育過程で被った学力面での不利や困難は、現在の勉強に影響を及ぼし、それに抗おうとしながらも抗いきれず、更にその先の学力低下をもたらしていることが読み取れる。

ii 部活動

子どもたちがどの部活をするかを選択する際、A、D、Fのように小学生の頃からスポーツ少年団やスクールバンドなどの集団で行う習い事をしていて、中高も同じ内容の部活を継続する傾向が見られた（表４参照）。小学校の頃の経験は中学以降の部活の選択に大きな影響をもたらすようである。

いやー、小学校から楽器吹いてたんで、そのまま続けたって感じ。《D：家庭児童》

更に部活動の友人関係は、部活動以外の時間においても子どもたちにとって重要なものとなっていた。

クラスの人とは遊んだことないですね。クラスの人に卓球の人もなくて。だから卓球部の人と一緒にカラオケ行ったり。《B：家庭児童》

A、B、D、Eは部活外の時間も部活動の友人と共に過ごすことが多く、休日に遊びに行く相手も部活動の友人としている（表４参照）。子どもたちが部活動を続ける背景には、そこで得られる仲間の存在の大きさがあることが窺われる。

２）人間関係における主体性

i 友人との関わり

友人との遊び方について、中学校から高校に上がるにつれて遊ぶ場所が家の近くから「街」へと変わり、子どもたちは消費者として金銭を介した遊び方をするようになっていた。

その中で特徴的だったのは、Fの友人と遊ぶ際

表4 部活動・友人との関わり

	A(公立高3男子)	B(公立高1男子)	C(公立中1男子)	D(私立高1女子)	E(公立中2女子)	F(私立高2女子)	G(公立高1男子)	H(私立高3女子)
中学校	部活の種類	野球	①図書局【生徒会】(中2・3) ②卓球(3年間)	バレー部	吹奏楽部	ソフトテニス	ソフトボール	1年の時にテニス部
	入部/退部の理由	小学校から継続	①ー ②小学校の時に映画「ピンポン」を見て卓球が面白そうだったから/先輩が優しくそうだったから	習い事でしている空手の先輩に誘われて、面白そうだったと思ったため	小学校から継続・楽器をアルトホルンやチューンパからクラリネットへ変更	見学の時の先輩の雰囲気が良かったため	小学校から継続中3で施設が変わるまで	バスケット部がなかったため友達が入ったため
高校	部活の種類	野球	卓球	ー	吹奏楽	ー	ソフトボール	バスケットボール
	入部/退部の理由	中学校から継続	中学校から継続	ー	中学校から継続	ー	中学校から継続怪我により退部	前から好きだったため
友人との関わり	野球部の友人と「つるんでいる」	黒板に絵を描く	図書館へ行って一緒に本を読む・教室で話す	他クラスの部活の友人と話す	部活の友人と外に行って喋る	ー	クラスの友人と仲良し	話す・携帯電話
	街で買い物・友達に付き合っゲームセンターへ	部活の友人と部活後に、高校近くの大型スーパーで飲食	部活のためあまり遊べず、部活休みの日は時々遊ぶ	ー	「全然遊べない」	カラオケ	カラオケ	近くの駅のスーパーで友人や先輩と何か食べたり話す
	中学が同じ友人や高校の友人と遊ぶ	部活の友人とカラオケや、高校近くの大型スーパーで飲食	空手の先輩と遊ぶ	部活の友人と「パート会」・ご飯を食べに行く・カラオケ・ボーリング	部活の友人と買い物・映画・カラオケ	「(住んでいる所が)遠いから会わない」	自転車どこかへ行くカラオケ	カラオケ・ブリラ

に感じている意識である。

(月々のおこづかいが)5000円だけど、多いと思うけど、友達とかと比べたらやっぱり少ない。【友達どれくらいなの?】1万もらってプラスバイト代。だから合わない、価値観が。遊べないし。【どっか遊びにいいこうみたいなやつとやってこと?】なんかご飯食べに行くとかだから、私の感覚的にはカラオケぐらいが丁度いいけど。なんかパスタ食べに行こうとか。高い高い高いみたいな。《F:施設児童》

Fの場合、友人がおこづかいとアルバイト代を交際費に当てることができるのに対し、自身は月々のおこづかいだけでやりくりしなければならず、「友達とかと比べたらやっぱり少ない」と交際費

に当てられる金額の差を意識している。そのため「合わない、価値観が。」という意識を持っている。

このように経済的に頼れる存在が確立していないということは、施設退所後の生活に困難を与えるだけでなく、施設という守られた場にいる場合にも制約をもたらす。また、その制約は、遊びに行けないという事実だけでなく「自分の価値観は周囲の友人と違う」という内省を子どもたちに与えるのである。

ii 教師との関わり

E、F、G、Hは良く話す以上に悩みや相談を「聞いてくれる」存在として教師をあげた。教師が話しを「聞いてくれる」存在となっている時、子どもたちには話しをしたことで悩みが解決する場合と、「聞いてくれた」ことだけで助けとなると意

識される場合があるようである。

また、施設児童の3人がすべて「話を聞いてくれる」存在の教師を意識している。

(中学の頃)良く話すとしたらやっぱり、担任の先生とか。【結構いろんなこと話したりした?】はい。【勉強のこと以外のことも?】なんか、やっぱここ学園だから、生活とか、ちゃんと話聞いてくれたりしたし。《G：施設児童》

Gは施設の生活のことについても相談すると述べており、学校の教師は施設児童にとって、施設職員に言うことが出来ない生活の悩みや愚痴を言うことの出来る存在として意識されていることが示唆された。

(3) 習い事

1) 場における主体性

習い事を始めたきっかけは「友人に誘われたため」「家族の誰かがやっていたから」「やらされた」などがあった。

(習字について、現在暮らす施設に来てから)小学生全員やってるからとりあえずやりなさいって言われてやった。……でも文字は上手くない。【習字楽しかった?】楽しかった。《H：施設児童》

Hの語りにもあるように「やらされていた」というネガティブなきっかけでも、習い事自体へは「楽しかった」というポジティブな印象が見られた。そのため、習い事を始めたきっかけが、必ずしも習い事そのものの継続の長さや、習い事への印象を決定づけるわけではないことがわかった。

2) 人間関係における主体性

習い事は学校の友人以外の友達が出来場となっており、良い関係性を築けた場合、その習い事自体にもつ印象がポジティブなものになっている。

【塾大変だった?】いやー、大変だったって

うよりは楽しかったっていう記憶がすごいあります。【先生が面白かったの?】結構友達、違う学校の友達とも話せたし、先生も面白かったっていうのも、ですね。《D：家庭児童》

一方、Fのように習い事を構成している子どもが自分より年下である場合、習い事にネガティブなイメージを持つようである。

【(ソフトボールのチームは)何年生から入れるの?】小1から。【小1から小6で26人(笑)】マジ日本語通じねえみたいなの。《F：施設児童》

Fは年下の子どもに対して「マジ日本語通じねえ」と語っており、一括りに「子ども」とまとめられる中で、当の子どもたちは年齢によって差異を感じ取っていることがわかる。

(4) 将来の見通しにおける主体性

1) 就きたい職業

将来就きたい職業に関し、周囲の大人の職業がモデルとなって影響を及ぼすことがわかった。その影響の仕方はプラスに働くだけでなく、マイナスに働く場合もあることが子どもたちの語りからは示唆された。

学園とかでも、そういう、調理の先生とか見て、そういう仕事(料理人)なんかすごい興味あったりしますし。なんか、なんかそういう美味しいもの作りたいっていう気持ちも結構あったりしますし。《G：施設児童》

【将来教師になりたいとかあるの?】いや、なりたくないです。……(両親が)すごい大変そうなので、嫌だなど。【仕事の話とか結構きくの?】結構聞きます。《D：家庭児童》

Gが周囲の大人の職業も視野に入れているのに対して、Dは両親と同じ職業には就きたくないと言っている。

また家庭児童と施設児童の間で、就くことの出来る職業の可能性の幅の違いが明らかになった。

【どんなことしたいの?】事務。【なんで事務なの?】うーん、地味なことが好きだから。ほんとに介護福祉士になりたいけど。……【そっか、福祉系に就きたいって感じなの?】前は心理士にもなりたかったし。なかなか福祉系目指すけど、うーん、どうだろうみたいな(笑)【難しい?】(うなずく)《F:施設児童》

内定は決まった。……でも学園の紹介だから。【決まってよかった】元々学園の紹介で入るつもりなくって。なるべくなら自分の力で入りたくって。《H:施設児童》

FやHのように施設児童の多くは、高校卒業後に就職の道を選ぶ傾向がある。しかし、高校卒業で就くことの出来る職は限られる。そのためFは「ほんとに介護福祉士になりたいけど」実際に就くことが出来ず、「地味なことが好きだから」「事務」に就くと自身を納得させている。またHの語りからは、就職先を決める際に施設のツテがある場所であれば難しいことが示唆される。

2) 「おとな」に持つイメージ

最後に子どもたちは「おとな」になることをどのように捉えているのだろうか。「自分で旅行等に行きたい」「お酒を飲みたい」などの回答からは、子どもたちが「おとな」を、自身の年齢のために自由に行うことが出来ないことが出来る存在として捉えていることがわかる。

香川県に行きたい。【なんで香川なの? うどん?】うどん食いたい、めっちゃ。……香川県行って、鳥取県で鳥取砂丘見て。で、ドイツでビール飲みたい。大人だったら(笑)《G:施設児童》

一方Fは「おとな」になることを、自分で「責任を取る」こととして認識していた。

【自分の将来のことで不安なこととかある?】責任。【責任ねー】責任がほんとに取れないから、自分。なんかあったときに頼れる人が…頼って

いいんだろうけど、そういう頼る、今みたいに、なんでも頼るんじゃなくて、自炊もしなきゃならないしそれこそ。光熱費も全部払わなきゃならないし、そういうところで責任が自分に来るのも、不安。《F:施設児童》

Fは「自炊」や「光熱費の支払い」など施設退所後に自分で行わなければならないことに対し、「責任が自分に来るのも不安」と述べている。また「なんかあったときに頼れる人が…頼っていいんだろうけど、そういう頼る、今みたいに、なんでも頼るんじゃなくて」という語りからは、施設退所後に頼りにできる存在が確立していないことが読み取れる。事実Fは施設退所後に祖父母宅に同居することを断られており、頼るという選択の余地がないことを意識している。

そして責任を自分で取ることへの不安により、Fは「おとなになりたくない」と言う。Fの語りには、施設退所と同時に「おとな」として自立しなければいけない施設児童たちが、自身の先行きに不安を抱えながら生活していることを示唆させる。

4. 貧困が子どもの主体性に与える影響

一般的に、程度の差こそあれ子どもの生活は親に経済的に依存せざるを得ない。そのため親の経済状況によって子どもの主体性に大きな違いが見られるということが予想される。青木(2003)によれば、日本の社会構造は「家族依存型システム」となっており、「国家の責任が、絶えず個人や家族の責任にすり替わるような社会構造」が今なお強く維持されている。そのため、子どもの経済活動は親の経済資本に頼る比重が大きくならざるを得ない。そうすると、家族の経済的な格差は「子どもの活動と経験を制限する方向に作用」する(松本 2008)。

本研究では貧困状態に置かれた子どものグループとして、児童養護施設で生活する子どもを対象とした。先にも述べたとおり、児童養護施設の子どものたちは、政策的な介入により一定水準の生活環境が保障された場所で生活しており、貧困の現

れ方は軽減するはずである。しかし実際には、児童養護施設に暮らす子どもの不利は解消しきれていないという現実がある。

高口・生田（1991）の研究では施設児童の父母の学歴、職業、生活状況に関し、圧倒的多数が低学歴、周辺労働者、貧困状態にあるという家族的背景を明らかにしている³⁾。また妻木（2011）によれば、児童養護施設入所児童の全日制高校進学率や、「大学等」への進学率は全国平均との格差が著しい⁴⁾。これらの研究が明らかにしているのは、児童養護施設の子どもが入所前に生活していた家庭の多くが貧困状態にあったということだけではない。子どもたちが児童養護施設で保護され安全に生活しているにも関わらず、進路の選択に不利が生じ、結果として貧困が世代を超えて再生産される可能性があるということも表しているのである。

本調査における施設児童にも、上記のような進路選択に関する事項だけでなく、生活の多くの場面で貧困が主体性に影響をもたらしていることがわかる。本調査結果からは具体的に以下の点が明らかになった。

（１）限定される生活全体のやりくり

貧困は、まず初めに子どもたちがどのように消費行動を行うかに影響をもたらす。何にどれだけおこづかいを使うのかを選択する際、経済的に頼れる大人がいない施設児童は、家庭児童よりも狭い選択の幅の中でそのやりくりを行わなければならない。

また子どもたちは、どの場にどれだけの重要性を置くかという選択も行っている。本調査時点で家庭児童全員がアルバイトを行っていなかったのに対し、施設児童は三人中二人がアルバイトを行っていた。家庭児童の場合、たとえ校則によるアルバイトの禁止がなくても、部活動や勉強を優先するだろうことが示唆された。一方施設児童の場合は、退所後の自立に向けたアルバイトを行うことは必須であり、自身の優先順位の中で行えるものではない。

貧困は経済的側面でのやりくりのみならず、何に重要性を置くかという選択や、その結果として

の行動に影響を与えるのである。

（２）他者との差異の感覚

おこづかいやアルバイトで稼いだお金をどのように使うことが出来るかということは、交友関係における意識にも影響を及ぼしていた。Fは周囲の友人との経済状況の比較から、おこづかいが「少ない」という不満を抱くだけでなく、実際に遊びに行くことが出来ないという行動の制約による疎外感を感じ、更に友達と「価値観が合わない」という感覚を抱いている。

このように自由に使える金銭の違いは、何にどれだけお金を使うことが出来るのかというやりくりの側面だけでなく、自身と周囲の間に差異の感覚を作り出すのである。

（３）進路選択の幅の縮小

貧困は将来における見通しを抱く際にも影響をもたらす。これは高校卒業後の進路選択に関する意識に表れている。先に述べた「家族依存型システム」の中で、家族の持つ資源や能力格差と市場経済化の推進とが結合し、貧困・不平等は拡大・顕在化する（青木、前出）。それが色濃く反映されるのが教育費の問題である。鳥山（2003）は、日本は教育費の負担責任や「資金計画を遂行する責任を家族に求める」ことを指摘する。

このような教育費の構造は、子どもたちの進路選択にも大きな影響を及ぼしていた。早い段階から経済的に自立を強いられることにより、施設児童の多くは高校卒業後に就職の道を選ぶ。そこには元々「大学に行く」という選択肢が無いに等しい。家庭児童は全員高校卒業後の進路を大学進学と考えているのに対し、施設児童は二人が就職、一人は専門学校進学を希望している。この希望の違いは、大学進学にかかる膨大な経済的負担を肩代わりしてくれる存在の有無に起因するものと考えられる。

５．おわりに

本研究の目的は、子どもたちの主体性が貧困状況下に置かれることでどのような影響を受けるのかということを明らかにすることであった。その

ため異なる階層に位置する二つのグループの子どもたちにインタビュー調査を行い、生活全体における主体性を各局面に分けて描いてきた。

今回子どもたちの主体性に注目することで、子どもたちが日々の生活にどのように向き合い将来の見通しを抱くかには、家族が生活の基盤として頼りにできる存在となっているかどうかが影響していることがわかった。これは家庭・施設という局面や将来の見通しにおいて鮮明に表れていた。

家族が頼りにできる存在として確立している子どもに比べ、そうではない貧困状況下に置かれた子どもは、日常生活への向き合い方が変わり、その中で他者との差異の感覚や、将来の見通しにおける不安を抱いている。これは貧困が家族依存型システムと相互作用しながら、子どもの将来に影響を及ぼすだけでなく、現在にも影響を及ぼしているということである。

子どもは大人と同じように働きながら自立した生活を行うことは難しく、必ず頼りにできる存在が必要となる。親が頼りにできる存在ではない場合、それがそのまま不利や困難として子どもに影響を及ぼすような家族依存型システムからの脱却は急務と言えるだろう。

注

- 1) なお、大澤（2008）は比較対象として安定層の子ども達にもインタビューを行っている。
- 2) 浅海（1999）はまず主体性の概念を「他のもの { 周囲の言動、自分の中の義務感（こうしなければいけないといった考え） } にとらわれず、行為の主である我として、自己の純粋な自由な立場において、自分で選択した方向へ動き、自己の立場において選択し、考え、感じ、経験すること。また、そういった、心の構えがある状態」と定義した。その上で調査を通し、積極的な行動・自己決定力・自己を方向付けるもの・自己表現・好奇心という五つの因子からなる主体性尺度を作成した。
- 3) 父母の学歴について、不明が父 41%、母 52%を占めており、情報としては不十分とはいえ、それを除くと中卒以下の学歴が父 72%、母 71%を占め、全体

として低学歴者が多いことは指摘しうるとする。

また父母の職業については、「不明」と「離死」が合わせて父 30%、母 52%であり情報が限られるが、残りの中でみると、父親の職業は「無職」が 24%を占め最も多く、「工員」22%、「自動車運転手」20%、「単純労務・日雇い」10%、「職人」17%など肉体労働の職種がほとんどを占める。一方、母親の場合、「無職」が 40%を占め最も多く、その他では「飲食サービス業」21%、「店員」8%とサービス業が中心である。

最後に入園時の家庭の生活状況について、「生活保護世帯」が 19%、「準用保護世帯」が 18%であり、合わせて 4 割近い家庭が公的扶助の対象となっている。それ以外にも、生活が「やや不安定」とされた世帯が 36%あり、「安定している」とされた世帯は 10%に過ぎないというように、ほとんどの世帯が貧困状況にあると考えられる。

- 4) 児童養護施設入所児童の全日制高校進学率は 2004 年度で 69.9%、「高等学校等進学率」は 87.7%となっているが、全国平均 97.6%を 10%下回っている。更に、高校後の進路については、「大学等」への進学率は全国平均が 66.3%（2004 年度）、67.5%（2005 年度）であるのに対して、児童養護施設入所児童ではそれぞれ 19.1%、16.0%にとどまっている。

文献

- 明石要一他（2009）「子どもの 24 時間の過ごし方と時間に関する意識—放課後の生活時間調査」（2008 年）の結果から」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』61
- 青木紀編著（2003）『現代日本の「見えない」貧困』明石書店
- 浅海健一郎（1999）「子どもの『主体性尺度』作成の試み」『人間性心理学研究』17（2）、154-163
- 藤村まどか（2011）「貧困研究において『子どもを主体として捉える』とは—Ruth Lister 著『Why Citizenship』を手がかりに考える」『教育福祉研究』17、77-88
- 久本信子、三笠友紀恵、金築優子（2003）「子どもの習い事の現状—性、年齢、居住地域との関連」『夙川学

- 院短期大学研究紀要』27、29-51
- 堀場純矢(2009)「児童養護問題の階層性—児童養護施設6か所の調査実態から」『厚生の指標』56(10)、7-13
- 伊藤嘉余子(2010)「児童養護施設入所児童が語る施設生活—インタビュー調査からの分析」『社会福祉学』50(4)、82-95
- 鹿毛弘通(2006)「活動行事を通じた児童養護施設における自立支援」『月刊福祉』89(5)、48-51
- 神原文子・高田洋子編著(2000)『家族社会学研究シリーズ④ 教育期の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房
- 小西祐馬(2003)「生活保護世帯の子どもの生活と意識」『教育福祉研究』(9)、9-22
- Lareau, Annette. (2003): *Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life*, University of California Press.
- Lister, Ruth. (2004) *Poverty (1st edition)*, Polity. (=2011、松本伊智朗監訳・立木勝訳『貧困とはなにか』明石書店)
- 松本伊智朗(1987)「養護施設卒園者の『生活構造』—『貧困』の固定的性格に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』49、43-119
- 松本伊智朗(2008)「子どもの貧困研究の視角—貧困の再発見と子ども」浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編『子どもの貧困—子ども時代のしあわせ平等のために』明石書店、13-61
- 松本伊智朗編著(2010)『子ども虐待と貧困—「忘れられた子ども」のいない社会をめざして』明石書店
- 長尾英彦(1992)「校則による『生徒の自由』の制約」『中京法學』27(2)、1-18
- 長瀬正子(2011)「児童養護施設での生活」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社、40-71
- 西田芳正編著(2011)『児童養護施設と社会的排除—家族依存型社会の臨界』解放出版社
- 西田芳正(2011)「児童養護施設経験者調査の経緯と本書の概要」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社、3-8
- 大澤真平(2008)「子どもの経験の不平等」『教育福祉研究』(14)、1-13
- Ridge, Tess. (2002) *Childhood poverty and social exclusion*, The policy press. (=2010、中村好孝・松田洋介訳『子どもの貧困と社会的排除』桜井書店)
- 高口明久・生田周二(1991)「養護児童の進路形成—家族的背景、施設・学校生活及び学校卒業後の生活の関連」『鳥取大学教育学部研究報告・教育科学』33(2)、354-433
- 谷口由希子(2006)「児童養護施設の子どもたちと生活の立て直しの困難性」『教育』56(12)、26-33
- 谷口由希子(2010)「児童養護施設で生活する子どもたちの退所の様相—生活家庭の縦断調査の結果から」『貧困研究』5、110-118
- 東京都福祉保健局(2011)『東京都における児童養護施設等退所者へのアンケート調査報告書』
- 鳥山まどか(2008)「家族の教育費負担と子どもの貧困—機会の不平等をもたらし教育費システム」浅井春夫・松本伊智朗・湯澤直美編著『子どもの貧困』明石書店、194-214
- 津崎哲雄(1982)『養護児童の声—養護児童による養護問題検討会報告書』
- 妻木進吾(2011)「頼れない家族／桎梏としての家族—生育家族の状況」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社、10-39
- 妻木進吾(2011)「児童養護施設経験者の学校から職業への移行過程と職業生活」西田芳正編著『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社、133-155
- 山屋春枝(2009)「一時保護中の子どもたち」安部計彦編著『一時保護所の子どもと支援』、明石書店、141-160
- 矢野博之(2000)「部活動における人間関係」(西島央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子「中学校生活と部活動に関する社会学的研究：東京23区内における質問紙調査を通して」)『東京大学大学院教育学研究科紀要』39、137-163
- (北海道大学大学院教育学院・修士課程修了)